

### <参考 分娩予定月日の計算例>

おおよその分娩月日がわかります。

$$\text{分娩予定月日} = \begin{cases} \text{人工授精した月から3を引いて分娩予定月} \\ \text{人工授精した日に10※日を足して分娩予定日} \end{cases}$$

例：5月15日に人工授精を行った・・・(5月-3) = 2月  
(15日+10※) = 25日

この場合は分娩日は来年の2月25日頃となります。

※) 5～10日まで幅があります

## (5) 繁殖台帳の見方

授精師が、人工授精後に記入する台帳は、『この日にこの種を付けました』という記録です。

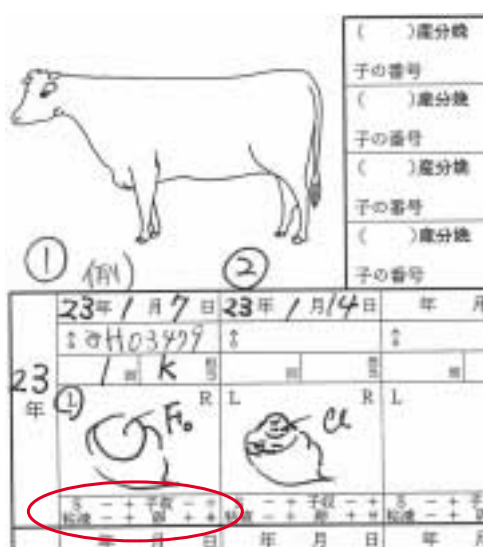


図4 繁殖台帳

授精師の書く絵は、牛の卵巣を簡単に書いたもので、RやLは(R)右の卵巣や、(L)左の卵巣の所見を表しています。

①日付け、種雄牛番号、回数、授精師名または授精師番号など。図4の場合、“L(左)にF(卵胞)があったので授精(AI)しました”ということです。

②LにCL(黄体)が付いていた。という意味です。

③授精時の状況等もチェック・記入します。

- S - + →スタンディングの有無、強さ
- 子収 - + →子宮の収縮状態
- 粘液 - + →粘液の有無、質
- 卵 + # →卵胞の状態

## 2 授精適期と分娩間隔

### (1) 育成牛の授精適期

未来のエース育成牛は、いつから「種付け」できるのでしょうか？

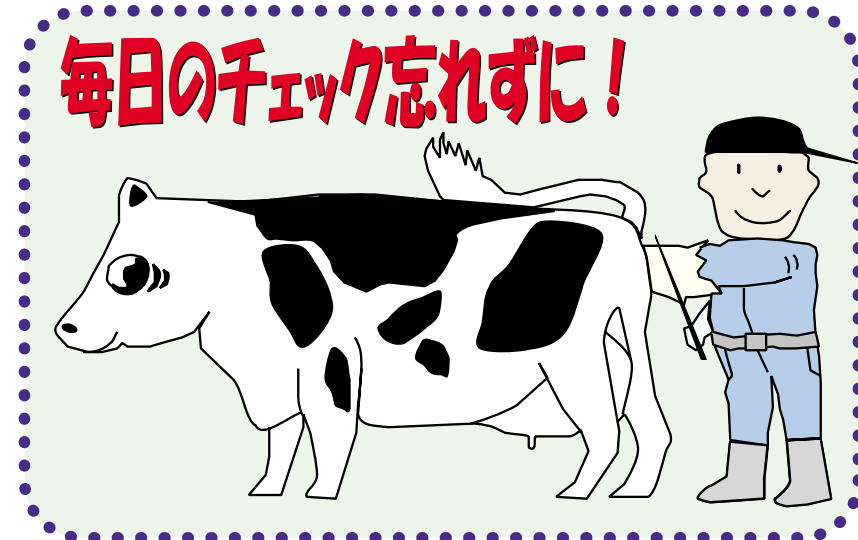
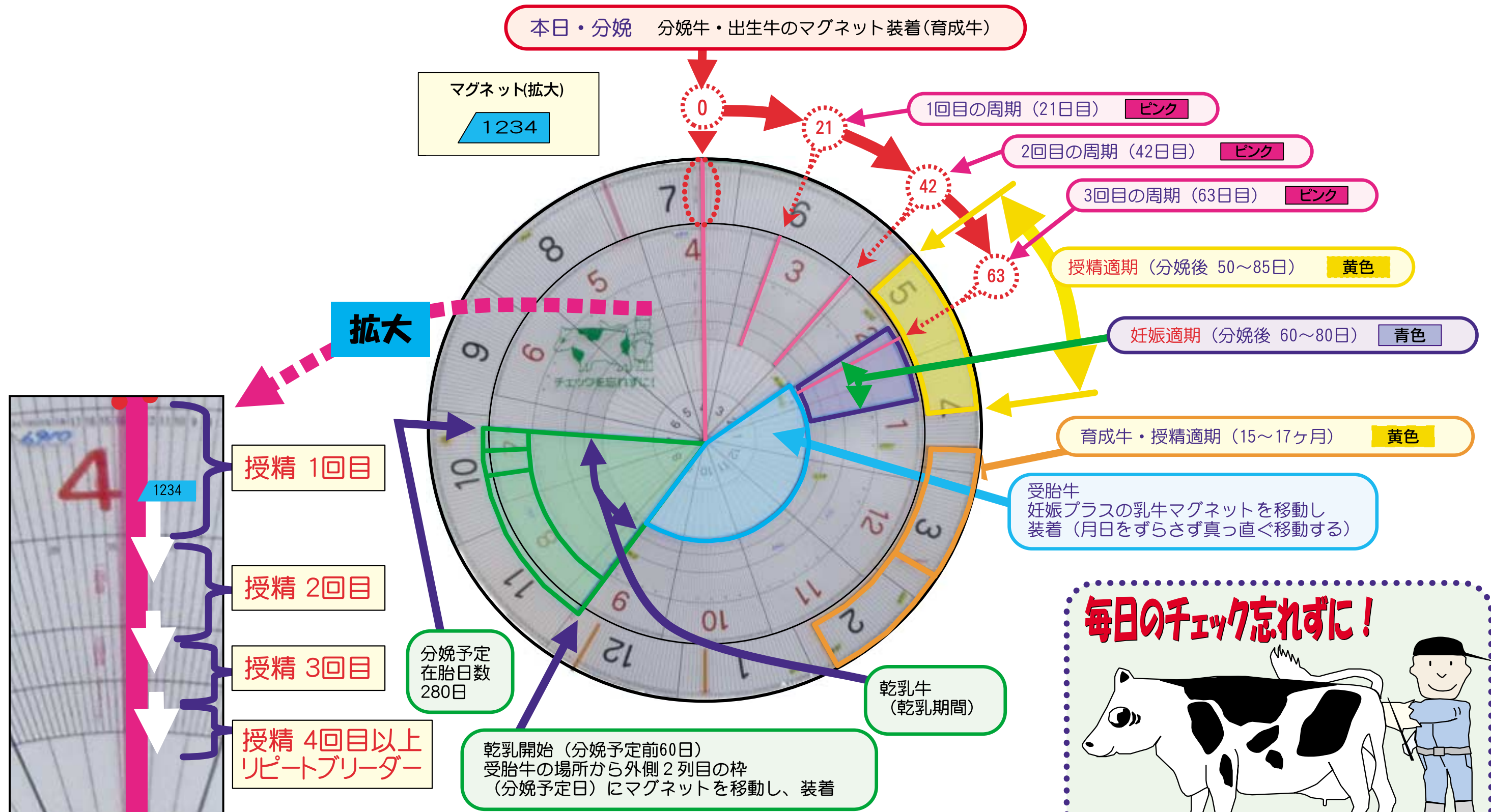
- ・発情開始 8～9ヶ月齢から
- ・育成牛の授精の目安 15～17ヶ月齢(発育状態を重視する)
- ・授精時の発育の目安 体重350 kg 体高125 cm

育成牛の授精開始月齢はとても重要で、初産分娩の遅れた牛は、2産目以降も分娩期間を短縮することはできず、結果的に生涯生産乳量/日を減少させることとなります。初産の分娩月齢は初回授精の月齢から、受胎までにかかった月齢に左右されます。

もう一つ大切なことは、発育状態を考慮することです。授精開始の月齢は11～14ヶ月齢が望ましいですが、発育状況を把握し発情を充分観察し、記録を重ねて、適期に初回授精を行うようにします。体の中まではわからないので、観察しているのに発情が来ない等という場合は、月齢やその牛の以前からの外見の状態を説明し、獣医師や、授精師に授精可能かを診てもらいます。

# Breeding Calendar 【繁殖カレンダーの使用手法】

## 一目でわかる繁殖管理ボード、分娩間隔の短縮に！



※上記、使用手法は繁殖カレンダー説明書を引用し作成致しました。  
(作成・JA道東あさひ 西春別支所 生産課 坪内省志)

## (2) 経産牛の授精適期

経産牛は分娩後いつから「種付け」できるのでしょうか？

・分娩後の子宮回復	40 ～60 日
・空胎日数の目標	85 日
・分娩間隔の目標	365 ～395 日

これは、無事に分娩を終え、通常の子宮回復の日数です。難産で介助が必要だったり、後産停滞で治療を受けていたりすると、さらに回復が遅れます。また、分娩から最初の発情は、発情兆候を見せない「サイレントヒート」といって、7～8割の発情は外部に現れません。しかし、人間にはわからなくても、微弱な兆候を牛どうしで嗅ぎ分けてくれるので、人間は「分娩した牛をマーク」することが重要です。

とはいえ、分娩後、授精適期になっても発情兆候をハッキリと見せる牛は減少傾向にあり、発情自体見つけにくくなっている、というのも現状です。

繁殖成績が悪く、分娩間隔が長くなってしまえば、個体乳量だけでなく、牛群乳量に影響が出てきます。乳量が減るということは、収益にも影響を及ぼします。酪農経営において、最初に目を付けていただきたいのが繁殖成績であり、繁殖成績による経営ロスは、乳房炎と「同じ」といわれています。

だからといって、分娩間隔が短ければ良いとか、長ければ良いのではなく、生乳生産と分娩間隔の関係がちゃんとあるのです。

## (3) 分娩間隔の適当な期間

長すぎるとピークを過ぎた泌乳後期が長くなり生産性が低下してしまい、さらに乾乳期間が延長すると、産後の病気も起こりやすくなります。

## (4) 生乳生産と分娩間隔の関係

- ・牛乳の収益は分娩間隔が395日（だいたい13ヶ月）以内の時に最大になります
- ・牛群の乳量は、分娩間隔365～395日（12～13ヶ月）の範囲内であれば差がありません

このことからいえるのは、目標分娩間隔を395日以上に伸ばしたり、365日未満に短縮する「意味はない」ということです（酪農ジャーナル デーリィ・マネージメントより）。

### <繁殖管理のポイント>

- ・発情を見回る時間を作る、または「ながら時間」を活用
- ・発情発見補助器具の活用
- ・繁殖カレンダー等で全体の繁殖状況がわかるようにする
- ・誰が見てもわかる記録をとる
- ・生涯生産乳量を左右する育成牛への適期の授精
- ・分娩後のサイレントヒートを見逃さない
- ・収益アップにつながる適切な分娩間隔